

## 『本屋です、まいど』

岩根 ふみ子

### はじめに

皆さん、こんにちは。なんか私は、ちよつと変わった講師であると学長先生からご紹介いただきましたけれども、私自身はいたってあたりまえの、いたって何の変わりばえもしない本屋のおばさんを、一代やってきました。今もやっています。そういう私ですけど。一四時十分までの時間を私にいただいています。絶対に寝ないでください。ごはん食べておなががふくれて眠たいのはわかります。暑いです。ちよつと蒸します。けども我慢して聞いてください。私の話を聞いたから、それがどうだというのは、あ

なた方の責任です。私は、ただしやべるだけです。

一九歳で、本屋をやっている主人のもとに嫁いできました。一八歳で婚約しまして「せめて一九歳の誕生日まで待ってください」と言って一九歳と一週間で嫁いできました。皆さんの年頃にはもう子どもがいきました。二四歳で男の子が三人おりました。もう今は四四歳になります。私が、じゃないですよ、長男が四四歳になります。その中でずっと本屋をやってきているわけですが、どんなところで本屋をやっているのかなど。皆さんが想像されるのは都会の大きな本屋さんをイメージされているのではないかと思います。TBSの全国ネットで放映された、私がどんな思いで、どんなところで、どんな仕事をしているのかを取材に来ていただきましたビデオがありますので、先にそれを見ていただくと、私の周りの風景がどんなものか、どんな思いで仕事をしているか、少しわかっていただけるのではないかと思います。まずビデオを見てください。

（ビデオ）

【本屋です、まいど】

ナレーション

琵琶湖の最北端、滋賀県木之本町。人口一万人のこの町の本屋さんに隣町から嫁いで四五年の岩根ふみ子さん。毎日百軒の配達をこなし、外商セールズを中心に本を販売しています。その販売実績は本屋さん仲間では全国に名を知られているほどです。そんな岩根さんは、日々の生活をどう思うかで送ってきたのか、その胸のうちには父と母からの大きい人生の贈り物があるのです。

岩根

自分のね、父が亡くなった時、父親のそばに座って手を握って、じつと見ていた時に、人間、生まれたら必ず死ぬんだよと聞いてはいたけれど、実際に死ぬという間近に体温を通して父の手から伝わってくる、底冷たくなってくる、あたたかかった手が。実際自分の手を通して感じて、死ぬというのはこういうことなのか。父の死を間近にみた時、ああ私も死ぬんだなと。父親の死を通して、自分の死を、その時に感じたんですよね。ああ、私も明日、死ぬかもしれないのやわ。死ぬというのはこういうことなんか、そういう思いでね、決して平均寿命

まで生きる保証は、どこにもないんだという、そこからね、何かほやほやしとっていいのかなと。今まで受け身で、のんびんだらりとは違いますが、今日一日の与えられた仕事だけを日が暮れるまでに済ませばいいというところから、死というところから仕事を考えるというのかな。

たかだか一九〇円の配達が面倒だ、マイナスになるという、足を引く張るとか、そういうふうにいるのか、出入りをさせていただけなんだという転換、同じ週刊誌をお届けしても『まいどありがとうございませ』とスツと言える。営業の利益はありますけど、もう一つ大きな意味は、商品を仲立ちにして、その奥さんと集金に行った時に話ができるという、そういうことが大きい。人との対話を持つために配達しているみたいなのです。

このままの状態がね、ずっと続くんでないという認識、私がこのままですつといられるというのではなく、いつまでもお客さんの家を訪れ

【本屋です、まいと】

て話ができる、そういうふうにはできないという認識があるから、今を充実させたいというのかな。それがある。老いること、死ぬことが頭から離れないので、無限にこのまま続くのであれば、もつとのんべんだらりと何も考えずに生活していたと思います。

ナレーション  
岩根さんが中心となって書店の奥さんたちと会をつくり、出版社の人から新しい企画本の説明を受け、実際の販売に生かしている。小さな町への大型店の出店など、さまざまな苦勞が岩根さんにはあったよう  
です。

## 母

私の実家の母ですけども、三年半、痴呆症でして、兄妹でみるということになってきた時に、ローテーションを組んで、この日は私だめ、この日は来る、とカレンダーに名前を書いて。兄妹五人なんです。五人と兄嫁さんとで六人がローテーションを組

んで母のそばに泊り込むんですよ。朝、こちらに帰ってくるんですけど。そういう生活がずっと続いて、こちらは主人の母が痴呆症で、そういう中で、この生活がいつまで続くのかなと、正直な話、思いました。

母が亡くなりました時、住職さんから弔電をいただいたんです。弔電は「お母さんは老いた身を上げて、精一杯私たちの中にある地獄をえぐりだして去られた仏であると思われませんか。お父さんは『お前、ご苦労だった』と迎えられたことでしょう。明楽寺、住職」。そういう弔電をいただいで、その弔電を読んだ時に愕然としたんですね。ほんとに「死んでくれたらいいのにな」ということを思い続けていましたし、母に直接「お父さん、何してはんのやろね。早う迎えにきたらいいのにね」と語りかけたりしていて、弔電によって自分の内面を知らされていくという、母がそこまで病まなかつたら思わなかつたであろうと思います。早う死んでほしいなんてことは。とことんまで病んで、いろいろな症状を呈してきた時に、母を殺していく気持ちがあるという、ほんとに縁があれば、親であろうと、子どもであろうと、自分はこの都合が悪ければ殺していくものを自分の中に持っているんだなと。レントゲン

【本屋です、まいど】

で写されて心が写るならば、私の内面、心は真っ黒けに写ると思います。そういうことを教えるによって「あなたの心はこうでしょう」と言われた時、「ほんとにそうでした」と頭が上がらないんですよ。

自分はね、少しはね、マシな根性というのか、少しはマシな人間だろうと思っていてるんですよ。けどね、そういうことをわかると、やさしい気持ちとか、よい心とか、一般的に言われることは、自分の心の中には一かけらもないんだという、悪人というのは私のことなんだと、そういうことに気づいていけるとね、そこにドンと落ちついていけるんですよ。だから気づいたから、そういうことを思わないかというと、また思うんですよ。人と話をしていても、その人の内面もその人は真っ白なんだということはありえないということを、同じ苦しみ、同じ悩み、同じなんだというところで共感していける。そういうものを教えられた。それはすごいことだと思います。だから上辺の仲良しこよしで手をつないでということではなく、ほんとに心の底で「あ、一緒なんだな」ということで、ともに感じられるものがあるんじゃないかなと思います。

## お寺の学習会に参加して

私はここの田舎の小さな本屋で、この境遇にいます。だから言ってみれば大都會の大きな本屋さんとは大きな本屋さんのやり方でやって、それはそれでいいんだろうと思う。皆、それぞれの色で輝いていたら、それで私は最高なんじゃないかなと。同じ仕事をしても人と比較しなくなる。人と比較するからしんどいんですね。あの人よりどうだと思ってしまう。だけど比較しないで、自分なりの自分にできることを自分なりのやり方でやっていったら、私はそれで最高だと思えます。

お寺の学習会に行きだしまして、これで三四年くらいたちます。月二回ですが、今もずっと寄せていただいています。もともとのきっかけと申しますのは、私が三〇歳くらいの時、まず子どもが三人の男の子です。やかましいです。喧嘩もします。おばあちゃんが「日曜学校をやってはるけど、入れたらどうや」と言いましたので「そんな、預かってくれるんやったら、一時間でも二時間でもええわ、どこでも行って



【本屋です、まいど】

ほしいわ」と言うて、子どもを日曜学校に行かせるようになりました。ある時、なんか行事をするというので「日曜学校に来ている子のお母さん方、チラシ寿司をつくるの、手伝ってください」と言われまして、お寺へチラシ寿司をつくりにいきました。お母さん方といろいろしゃべっている中で「子どもたちは上手に正信偈あげるようになったけど、あんた正信偈できる?」「いや、うちの実家は西本願寺さんで節が違うんやわ」「いや、私、曹洞宗や。全然、違うんやわ。法事の際に恥ずかしいなあ」という話から「そんなら私たちも正信偈、住職さんに教えてもらおうか。頼もうか」という話になりました。住職さんに「私たちにもお勤め、教えてください」ということで始まったのが、この学習会の始まりです。それで毎月二回なんです、いろんな話が出ます。

自営業の長男のところへ嫁に来てくれる人がいない。それで嫁さん探しをしても大変なんです、今はね。ここにこんなたくさんお嬢さん方がいらっしやるのに、お嫁さんに来てくれる人がいないんですよ。それで、あちこちお願いしたり、探したりして、やっとお嫁さんが来てくれることになって。でも私は男の子三人ですので、女の

子とのお付き合いができない。わからない。わからない。けれども女の子だったら、一緒に買い物に行ったりできる人と違うかなと。楽しみにしていました。それで私、自分のセーターがほしくて買いにいきました。一万五千円でした。嫁さん来たことやし、嫁さんの一枚、買うてあげようかな。「今、若い子ってどんなん？」と店員さんと話をしながら「こんなんですか？」「そんなのかな」と言いながら一万八千円。「私のより三千円高いけど、まあ、ええか。初めてやし」と思っ一万八千円のセーター、買うて帰りました。嫁さんに「実は私もセーターほしかったし、あんたのも一枚買ってきたんや。よかったら着てね」と渡しました。嫁さんが「どんなんですか？」。袋パツと開けて「お母さん、私、こんな地味なの、よう着ませんわ」と言われたんですね。エツと思っ、自分の中では、絶対、「お母さん、ありがとう」という言葉が返ってくると思っ、たんですね。そしたら「こんなん着ませんわ」と言われて、こっちは「ありがとう」しかイメージしてないもんですから対応に弱っ、てしもうて、どない言うてええかわからへん。エツと思っ、て、いらんのやったらしゃあないなど。そのセーターは持っ、て返っ、てきたんですけども、おさまらんのは私です。その晩、眠られ

【本屋です、まいど】

へん、腹立って眠られへん。「私より三千円も高いの、買うたつたのに、気に入らなくて、どういうことやねん」。私はおばあちゃんにブラウスでも買うてもろうた時には授業参観に着るとか、常着にせんと、よそ行きに着たのに、まあ、なんやねんと思いかけたら眠られんようになってしもうて。

その明るる日が学習会の日やって、いろんな話の中で「聞いてえな」と。皆に「嫁さんに買うたら、こんなやで。腹立って眠られへん」。同じように学習会に見えている方は「そらそうや、自分の娘かて、私が買うたもん、着いへんで。今から言うといたるけど、孫のもんも絶対買うたらあかんで。孫のもんも、買うたかてな、着せはらへんで」と他の人は教えてくれる。住職さんは、どないいわはるかなとチラッと顔を見ました。「ふみ子さんは、自分は絶対間違いないと思うてるやろ」。私は何も間違えたことしてへん。嫁さんと仲ようやっていきたいと思ってる。それで買うてきた。絶対、私、間違えたことしてへん。ええことして思うので「そんな、間違うてへんと思うてる」と言いましたら「それを邪見驕慢と言うのや。邪見驕慢悪衆生とあるやろ。お勤めの中に出てくるやろ。あれはふみ子さんのことやで」と、その時、

言わはりましたん。それから「ああ、そうなんや。私は正しいと思ってる。間違うてへん。この人のためにこの人と仲良うなりたいたいから、こうしてプレゼントしようと思ったんや。そういう思いこみが、相手にしてみたら、嫁さんにしてみたら、有難迷惑やったんやな。いらん節介やったんやな」というのが、そこで初めてわかって「ああ、なるほどな」。学習会でそういう話を聞かへんかったら、今もお節介していると思います。今も何やかや言われながら「ほんまに、お母さんはろくでもないものばかり買ってきて」と言われていたかもしれないけど、それから一切買わんようになりました。買わんのが、良いのか悪いのか別として。自分の中ではきちっと自分のやっていることが決して正しいのではない。相手にとってはいらぬお節介、余計なお世話なんやということ自分を言い聞かせながら。

私がおんな話をする時「なんや水臭い」と言われるかもしれないけど「正しい」というふうには思い込んでいる私というものを、その時に指摘を受けて「なるほどな」と感じたこととございました。学習会はそういうことを教えてもらえるので、実際に生きた毎日の生活の中で、すったかもったか、やる中で「ああ、いらぬお節介やった、

余計なお世話やった」と自分の中で言い聞かせております。

## 父

ビデオでは父が亡くなった話をしましたが、私の父は一代農業をやっています、鋤、土をおこすもの。鋤で耕す。鋤と鋤で田んぼを耕して手で田植えするという生活でした。近くの在所で永代経や報恩講がつとまりますと田んぼを放つて(※畑仕事を中断して)、手や足や顔を洗って、自転車で話を聞きにいつてしまうんです。聞きにくいのはいいんですが、母が一人、広い田んぼを鋤で土を一ころずつ起こしているんです。「また行ってしまわはった」とぼやいていました。父はお寺でお話を聞いたことを手帳に書いてくるんですね。手帳を持って、夜、晩御飯を終わった後、きょうだい五人、母と座らされまして「今日の話はこうやった。いっぺんしか言わんぞ、よう聞いとけよ」というのが父の口癖で、手帳を見ながら、お寺で聞いてきた話を私たちにしてくれました。その内容は全然覚えていません。「まだ宿題してないのにな」と

思いながら聞いていました。話されても全部理解できたわけではなかったんですが。

そういう父だったので、私自身が学習会に行きました時、お寺で話を聞いている父がなんか身近に思えて、今までは親元に行きますと「お母さんは、どいかはったん？」と母を探しましたが、学習会に行きましてから「お父さん、いはるん？」と父のところへ行つて「学習会で聞いたけど、人間には四つの苦があるんやて。生老病死という苦があるんやて」と父のところへ話をしに行きました。そうすると父がものすごく喜んでくれるんです。「また聞いたら、わしのところへ話しにきてくれよ」と父が言うんです。しばらく配達とか仕事が忙しいと実家に御無沙汰しています。兄嫁から「お父さん、待つてはるで。この頃、ふみ子さん来はらんけど」と電話してくれるので、学習会で仕入れたネタを持って父のところへ話をしに行つてたりしてたんです。あまり父が喜んでくれるので「私はなんちゅう孝行な娘やろ。五人兄妹で私が一番お父さんのことを喜ばすのと違うかな。孝行な娘やわ」と私は思っていました。けど父の葬式が終わりまして初七日の時、法事が終わつて座敷でごはんをよばれる時、「お父さんの声、聞かせたるか」と近所の方が、カセットテープに父の正信偈さんと、

【本屋です、まいど】

白骨のお文さんを詠んだのをテープにとっておかれたものを初七日の時、聞かせてくれて。八〇歳過ぎていましたし、しゃべっても、ろれつが回らない父だったんですけど、テープの声は朗々としていましたね。胸が詰まりまして、その中の白骨のお文さんの中に「我や先、人や先、後生の一大事を心にかけて」というところで、なんかグサッと私の中に来たんですね。私はその時、あ、お父さんは私に、仏法に出会ってくれ、寺へ学習会に行ってくれという願いを持っていてくれはったんや。私自身は親孝行している、お父さんを喜ばせるためにお寺に行ってるんや。私は親孝行やと思っていたのが、とんでもない思い違いをしていた。これはお父さんが私に願いをかけてくれていたんや、ということが、そこで初めてわかりまして、それからネタを仕入れに学習会に行っていたのが、これは私自身の生き方の問題なんやということ、住職さんの一番前が私の指定席。そこにドンと座りまして、いろいろと話を聞くようになりました。

## 著 書

この本（『本屋です、まいど』）をなんで出したかと言いますと、私自身には本は売  
る商品であって、まさか自分が本を出すなんてことは考えてもいなかったんです。け  
れどもたまたま滋賀県の地名の由来、たとえば河原町はなんで河原町と言われるよう  
になったのか。そういう由来ですね。それが書かれている本なんです。私どもの住ん  
でいる木之本は、なんで木之本と言われるようになったのか、歴史的なことが載って  
いる。木之本は大阪湾に仏さんが流れてきはって、その仏さんを背中に背負うて、ど  
こかこの仏さんを安置するところがないかな、祚連上人が木之本の町にお見えになっ  
た。仏さんが重くなって動けなくなった。「あ、ここにいたいんやな」と。柳の木  
の下で、柳のもとから木之本、お地藏さんが木之本にお見えになりました木之本とい  
う地名ができたんですよというようなことが書いてある本です。一冊、二万二千元。全  
国都道府県全部出まして、一年前に完結しました。その時の滋賀県の地名を、面白い



【本屋です、まいど】

など。「どうですか？」と私は配達に歩きますので、配達先の奥さんと「あんたら、どこから来てはるの。実家はどこ？」と聞いて「私は古橋や」「古橋ってなんで言うのか知ってる？　こんなして書いてあったで。知ってたか？」。そんな話で小学校四年生になると社会科で地元のことをお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに聞いてきなさいという宿題が出ます。その時に「あなたは答えられますか。ご存じですか？」と脅し文句をかけまして本を買ってもらおうわけです。それでどんどん本を売りました、滋賀県でダントツの部数を売り上げたんです。

東京から平凡社の担当の人が見えるんです。主人も書店組合の役員をしていましたので、滋賀県の書店組合として販売銘柄に取り上げてほしいという用件もあって「何冊売れた」とかという話の中で「この奥さん、ちよつと変わってはるわ」ということで、担当の方がもともと編集におられた方で「奥さん、本を書いてくれませんか」という話になってしましまして、一年かけて『本屋です、まいど』という本ができあがりました。この中には、一代やってきた本の販売の底辺には、お寺で聞いた学習会のことがありますので、心の底はそこからの出発ですので、そこから書きまして、実際

にはいろんな商売の原点はここにあるんだと、保険の外交をされる外交レディ、銀行マンの方の教科書に、この本が採用されるに至りました。

私の母を殺してきた地獄を感じさせてくださった住職の弔電、「お母さんは老いた身を上げて、精一杯私たちの中にある地獄をえぐり出して去られた仏であると思われるませんか。先にいかれたお父さんは、お前ご苦労だったと迎えられたことでしょう」。あの弔電によって、ほんとに自分の内面がはつきり自分にわからせてもらったという。田んぼを鋤一つ、鋤一つで私たちを養ってくれて、何か困ったことがあったら「お母さん」と言っただけ母のところに泣きついていって。そんな母でも三年半も痴呆症で「おーい、おーい」と呼んでも誰もそばにいかんと。竹でドンドン叩いて竹が折れるくらい叩く。そういう母を見ってきました。ほんとになんとも言えませんでした。自分の母なればこそ、私もこうなるんかいなという思いが先に立ちまして、私も呆けたら、こないなるんやと、余計感情的に母が憎たらしい、悲しい、なんでお母さんは私たちを困らせるんやというところに私はいました。ほんとに当番が回ってきますと、母と一緒に寝るんですけど、私は母の症状、竹の杖を振り下ろす母の姿を見えますと、

【本屋です、まいど】

どうしても夜、ぐっすり眠れません。はよ夜が明けんやろかと、夜が明けると早々に本屋に帰ってきました。本屋に戻ってきましたして「夕べ寝られんかったから、寝させてもらうわ」と言う、「お前の看病は結構なことや。家に帰って寝られるんやさかいになあ」と主人から言われましたけど。午前中は寝て昼からは配達するという生活をやっていました。

よそにお葬式の飾りつけがしてあると「ああ、この人、死なはって、よかつたな。この奥さん、ほんまによかつたな。やれやれやろな」と思っていました。羨ましかったです。ほんとに死んでくれたらいいのにな、と思っていました。だけど、思っている私なんですけど、それを「悪いことや」とか「なんでこんなこと思うんやろか」という疑問すら抱かずに「ほんまにな」というところで生活してきました。けれども弔電によって、私の心は地獄なんだという、弔電がなかったら、そういうふうには気がつかないと思います。母が三年半も痴呆症を患わないで、父のように二、三日でコロコロと亡くなっていたら、私は自分の親を殺していくなんて、そんな恐ろしい心を持っていてなんて、絶対思わなかった。自分は気がつかなかったと思います。けれど

も、そこまで母が病んで、嫌な面をさらけだしてくれたおかげで、私自身もそういうことを感じさせられて、その通りやったなということを私は感じました。

### やり遂げる

先程、控え室で「岩根さんは、人のために本を勧めていらっしやるんですね」と話をしてくれましたが、「いえ、とんでもありませんよ、自分の利益のためにやってるんです。決して人さまのお役に立とうなんて、きれいな心はさらさらございません」と先程も申し上げたような次第ですが、突き詰めてみると、私の心の中は自分が一番なんです。自分の都合なんです。「私さえよければいいんだ」という性根が居座ってるんですね。そういうことに気づかせてもらうというのは寺へ行かないと気づかせてもらえないんです。寺に行ったおかげで、自分の内面を嫌というほど、知らせてくださった。それでなかったら、もっと、いい加減な生き方をしてきたと思います。

お寺には行き続けて、学習会に行きますと、主人が期待をするわけなんです。「少

【本屋です、まいど】

しは優しい人間になるんでないか。少しはもっと他人を思いやり、少しは愛想ような  
ると違うか」と淡い期待を主人は持っておりました。けれども私が学習会に行つて、  
何ら一向に変わろうとしない我が儘一杯の私でしかないので「お前、お寺に何しに行  
つてるんや。寺で何、聞いてるんや。お前、ちつとも変わらへんやないか」と言いま  
したけど「お寺へ行ったさかいいうて、変わらんでもええのやけども、変わらんでえ  
えということが、はつきりするとほんまに楽やで」と申し上げまして、ここ五年くら  
い前から主人も一緒に学習会に来るようになって今は一緒に議論しています。同じ学  
習会に出ると、とても生活が楽になります。考え方が同じになって「住職さん、そん  
なこと言うてはらへんやろ」と。自分本位やったなとわかってきますので、表面づら  
の道徳的でないことが、うそつばちや、ということがはつきりしてきますので、ずいぶ  
んと楽になってきました。

お寺に行きまして、お話を聞いていたら、お釈迦さんに会いたくなりまして「お釈  
迦さんに会いたい。インドにどうしても行きたい」とインドに二週間行ってまいりま  
した。二年ほどして、またどうしても行きたい。また二年ほどして、また行きたいと

三回行って「お前はアホか」と言われながら、それでもインドに行って「お釈迦様が初めてここで説法されたんですよ」というところに立ちまして、お釈迦様が説法されたその場に自分が立ったという、そのことに、この二千五百年前に言われたことが、ずっと仏法が継続されて七高僧と言われる正信偈の中に出てくる七人の高僧の方々から、住職さん、私の父とかを経て、私のところまでその教えが伝わったんだという、そういうものをインドのサールナートに立った時に感じて、深い感動を覚えました。私たちが今、こうやってお話させていただいていますが、もともと何億年前は一つの細胞であったものが、時を経て、進化して進化して、この人間まで伝わってきた。命の継続がなされてきた。仏法もその通りで、命の継続と同じように仏法が私どもの現在にまで伝わってきたという、そのことをインドの何も設備の整っていない僻地ばかりに行くわけですが、そういうところで下痢をしたり、立ち直れないくらい消耗した身体でインドを回ったんですけども。そこで伝わってきたという感動を改めて感じたことでした。

「また行きたいね」と言って、ここ二年ほど前、仏教学者のひろさちやさんと行こ

【本屋です、まいど】

うと、主人と兄夫婦、住職さん夫婦と申し込みをしたんですが、たまたま私の兄が脳梗塞で倒れて亡くなったりして、キャンセルして行けなかったんですが。本当に、できる時は一瞬なんですね。その一瞬、一瞬を精一杯やっていきたいと思えます。

私も息子たちが商売をやりだしまして、少しずつ手を放していつていきます。地元でお惣菜をつくるグループをまちづくりの一環としてやり始めました。日曜日もコロツケを百個つくりました。海老豆、琵琶湖で海老がとれるので大豆と炊くんです。これは滋賀県の特産品です。フキとコンブの佃煮とか、かき揚げとかをつくりまして、テナントを張って販売するわけです。朝三時に起きて、私はつくる人、他の人は売る人。これで七〇回くらい続いています、月二回。だんだん地元に着着していきます。皆、いきいきします。姉は八〇歳ですが、キュウリ、お茄子とか採れますと塩漬けし、桶の中に入れて保存します。それを水につけて、塩気を出してだし汁で炊くんです。塩押しの炊いたものを食べた人は昔懐かしい味ということで、独居老人の方、若い人と一緒に暮らしていても「そんなん、若い人つくってくれへん」ということで結構、売れたりしています。

もう一つやりだしたのが湖北エコミュージアム。米原から北を大きな博物館と見なしまして、そこにある伊吹山、余呉湖、琵琶湖、観音様などを一つの博物館の中の展示物と見なしましょう。それをご案内する人を地域学芸員と位置づけて研修会を何回も重ねまして、お客様に湖北の地に来ていただきましょう。湖北が活性化するようにいろんなプランを立てて、観音様を訪ねたり、地元の人と交流する旅行の企画を立てています。それをガイドしたり、また、ガイドする人を振り分けたりやっています。今年「蓮如さんと一緒に歩こう」という企画を立てました。蓮如さんの絵像が吉崎御坊を五月二日に発たれて東本願寺にお帰りになるんです。リヤカーに蓮如さんの絵像を軸にしたものを木の箱に入れて運ばれます。行く時は湖西を通られ、十日ほど吉崎で法要がありまして本山に帰られる。毎年五月五日に木之本を通られるんです。それが今年で三三三三回続いています。

それを旅行の一つの企画でやりましょうと。あちこちのお寺や宿泊の施設にお願いにいたりして企画を立ち上げました。が何分にも初めての企画ですのでいろんなことがありまして「取り止めようか」というところまでいったんです。でもせっかくの



【本屋です、まいど】

企画を「取り止めてはだめだ」ということも言われて、なんとかこぎ着けることができました。米原まで大型バスでお客様をお迎えして、栃の木峠、福井県と滋賀県の県境ですが、そこまでバスで行きます。今年は雪が多かったので、まだ雪があるかもしれない。四月二十九日に県境まで下見に行きますと谷間には雪が残っていて、道にはないんですが、がけくずれで通行止めとなっている。道いっぱいには護岸用のブロックが積んでありまして、私はそこにへたりこみまして「ウワー、どうしよう」。リヤカーの通るコースは決まっているので「下見に来てるんですが、通行止めになっていません」といっしょに企画をした仲間の人に携帯電話で連絡したらすぐに車できてくれあちこちに連絡を入れてくれました。当日は福井県の今庄を朝六時に出発して通行止めの峠はおひつに入られた蓮如さんのお軸を背中に背負って歩いてこられました。

私たちの「蓮如さんと一緒に歩こう」という企画は、途中で合流させていただき、いっしょに歩かせてもらうものです。

一つの企画を最後までやり遂げるのはほんとに大変なことだと挫けそうになりながら、ただどこかでやめてしまったら折角の蓮如さんが、ここまで頑張って三三三回

も続けてやってこられた先輩たちに申し訳ない。「もう、やめや」と言えないと思ひまして、何とかなし遂げることができました。たくさんの方のご支援をいただきました。支援していただかなかつたら私一人では身動きできないことでした。国民宿舎にお泊まりいただいて、翌日、別院やお寺をご案内させていただきました。参加された方にはたいそう喜んでいただきましたが、私もたくさんのことを勉強させていただきました。

### おわりに

その時、その時にできることは精一杯やり遂げたいなど、ビデオのタイトルも「できることを精一杯に」、今、私にできることは精一杯やりたい。私も六四歳ですが、まだまだ精一杯やっていきたいなと私自身、考えております。

ほんとに皆さん、最後まで聴いていただいてうれしいです。ありがとうございました。

——二〇〇六年六月二七日——